

授業番号31 「挨拶上級者になろう」～場面に応じた話し方をする～

場所：東棟1階 3－4教室

対 象：	高等部3年 男子3名，女子3名，計6名
授 業 者：	◎松本聖司 田中省三
授業期間：	1月19日～2月2日 全6回 11時間
本 時：	9時間目／11時間 10：45～11：30

ユニット参加児童生徒の障害	
☒ 知的障害	(5名 内，自閉症 1名)
☒ 知的障害・肢体不自由重複障害	(1名)
☐ その他	()

1. 本ユニットで取り扱う目標（3 ケース抽出）

児童 生徒	短期目標 （○：ユニットの中心課題） （・：取り扱う関連課題）	本ユニットで取り扱う行動目標
A	○指導者に対しては，丁寧な言葉で話す	・丁寧な言葉遣いで報告，発表をする
B	○決まりを守って友達と活動する	・発表したい時は挙手をする ・指導者に指名された時のみ発表をする
C	○助けられたり，手伝ってもらった時に 自分から「ありがとう」と言う	・一緒に活動する友達や指導者から荷物を取ってもらったり，車椅子を押してもらった時に「ありがとう（ございました）」と言う

2. 本ユニットについて

本ユニットは，生活の中での会話のやり取りや言葉遣い，挨拶にねらいがある生徒で構成されたユニットである。また，ユニットメンバーは，口頭での説明より，映像で視覚的に提示するほうが正確に理解ができる。

前期には，さまざまな場面での挨拶や自己紹介について，正しいモデルと誤ったモデルを指導者が示したDVDを観て比較し，正しい方法について確認した上で実践した。また，撮影された自分の挨拶をしている姿を観て振り返ることにより，自分自身の態度や話し方についても知ることができた。

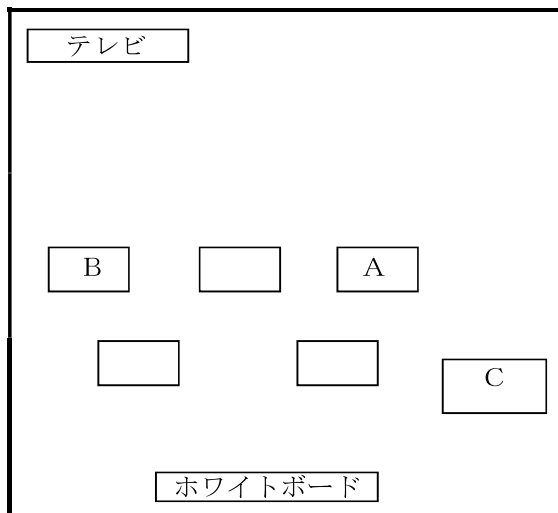
後期では，前期と同じ手順で，作業の際の質問や報告の方法や，よりの多くの場面についての会話や挨拶の練習に取り組む。本ユニットの活動を通して，様々な場面での正しい話し方と態度を身につけることにより，卒業後の新しい生活への自信に繋げていきたいと考えている。

3. 本時の授業について

(1) 本時の展開

学習内容	児童生徒の活動	できる状況づくり・支援
・挨拶	・係が号令をかける	・正しい姿勢がとれていない場合は、そのことを指摘し、再度号令をかけるように言葉かけをする
・スケジュールを確認する	・スケジュール係は、提示されているスケジュールカードを読み上げ、活動内容を伝える（B）	・見通しが持てるように本時のスケジュールを提示しておく
・挨拶DVDを見る	・DVDを見て、良い点、悪い点を発表する ・挙手をして、指名されたら発表する（B）	・生徒が興味を持てるように、設定した場面を指導者が演じたDVDを見せる ・ポイントがわかりやすいように、良い手本、悪い手本の順にDVDを見せる ・初めに指導者が手本を見せる
・状況を設定してシミュレーションをする	・設定された状況に応じた挨拶をする ・仲間に押ししてもらったら、「ありがとう」と言う（C） ・友達の挨拶を見て、良い点、改善すべき点を発表する ・挙手をして、指名されたら発表する（B）	・意見が出ない時は指導者がいくつか質問をする
・振り返り	・ビデオ撮影された自分の挨拶を見て、自分の良い点や改善すべき点をプリントに記入する ・プリントの内容を発表する ・丁寧な言葉遣いで発表する（A）	・良かったこと、頑張ったことを褒め、次回も頑張ろうという思いを引き出せるような言葉かけをする
・挨拶	・係が号令をかける	・正しい姿勢がとれていない場合は、再度号令をかけるように言葉かけをする

(2) 配置図



(3) 本時の評価

A	・丁寧な言葉遣いで報告、発表ができたか	
B	・発表したい時に挙手できたか ・指導者に指名された時にだけ発表ができたか	
C	・一緒に活動する友達や指導者から荷物を取ってもらったり、車椅子を押してもらった時に「ありがとう（ございました）」と言えたか	

授業番号28 「日常生活でできることを増やそう」～スキルを磨く～

場所: 中棟2階 2-1 教室

対 象: 高学部2年 男子6名, 女子1名, 計7名
授 業 者: ◎巻野洋也 飯田圭亮
授業期間: 12月15日～3月3日 全8回 15時間
本 時: 9時間目/15時間 10:45～11:30

ユニット参加児童生徒の障害

- ☒知的障害 (6名 内, 自閉症 3名)
☒知的障害・肢体不自由重複障害 (1名)
☐その他 ()

1. 本ユニットで取り扱う目標 (3 ケース抽出)

児童 生徒	短期目標 (○: ユニットの中心課題) (・: 取り扱う関連課題)	本ユニットで取り扱う行動目標
A	○課題が終わると, 指導者に伝えて次の活動に移る	・服を畳めたら, 指導者に伝え, 次の服をもらう
B	○話している人の顔を見て話を聞く ○指導者と話す時は丁寧な言葉遣いで話す	・報告をしている人の顔を見る ・質問や報告をするときは丁寧な言葉遣いで話す
C	○タブレット端末で画面が反応するアプリを利用し, 押したり触れたりして楽しむ ・学級や学年活動で VOCA を使い, 合図を送る	・指導者と一緒にタブレット端末を用いて, 活動中の様子を撮影する ・始まりと終わりの挨拶を VOCA を使い, 合図をする

2. 本ユニットについて

本ユニットは, 思いや要求・報告などを適切な言葉・方法で相手に伝えることを目標とする生徒や仲間と一緒にルールを理解して活動する目標などがある生徒で構成されている。

生徒たちは, どの活動においても, 意欲をもって取り組もうとするが, 一方で, 複数の人前で話すことや自分から他者に話しかけるなどのかかわり合いを持つことに課題がある場合が多かった。そのため, 様々な活動を通してコミュニケーション力を身につけることを大きなねらいとして取り組んできた。前期では, ツイスターをするために, シートやサイコロ作りから始め, 友達と一緒に作ったゲームで遊ぶことで, 友達同士の会話も増え, 友達に「右足が赤だよ」など意識してかかわり合う姿も見られてきた。

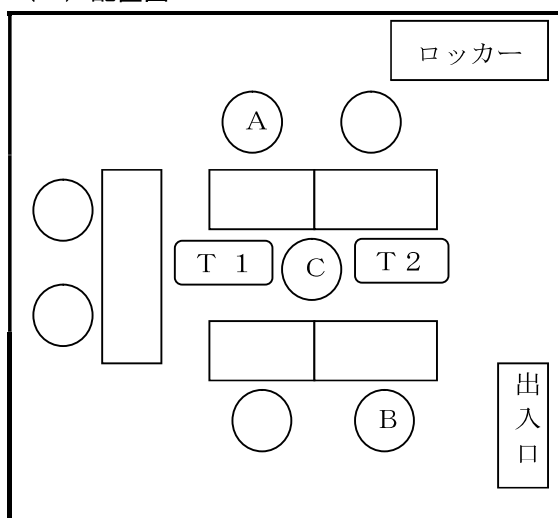
今回は洗濯物を畳み, 活動を撮影することで映像を見ながら反省会を行う。洗濯物を畳む中で, 指導者に報告する場面を設け, 反省会の中でも, どのような点が良かったか等, 生徒同士で評価し合う場面を設定した。そして, 相手からほめられることで自信を持って, 多くの人と様々なコミュニケーションをとり, 各自の「できる」ことを広げていきたい。

本時の授業について

(1) 本時の展開

学習内容	児童生徒の活動	できる状況づくり・支援
○始まりの挨拶	・代表生徒が号令をかける (C)	・指導者が押しやすい位置にVOCAを持っていき、合図をする。
○本時の活動の確認	・本時の目標を指導者から聞く (B)	・事前に黒板に写真カードと文字カードで目標を貼っておく
○洗濯物をたたむ	・服を1着畳み終わるごとに、指導者に「できました」と報告し、新しい服をもらう (A)	・畳む・報告・畳む、の工程が書かれた手順書を用意する ・服を1着ずつ渡し、指導者へ報告すると次の服がもらえるようにする
	・活動中の様子を指導者と一緒に撮影する。(C)	・支援器具を使って、タブレット端末を操作する ・指導者がタブレット端末の位置を決めた後、操作するよう合図をする
○片づけ	・使った用具や机を片づける	
○本時のまとめ	・撮影したビデオを見て、できた部分とこれから気をつけることを指導者から聞く (B) ・自己の振り返りを報告する (B) ・ビデオを見て友達の活動の感想を言う	・反省会の前に注意すること(話している人の顔を見る等)ことをイラストを見ながら確認する。 ・振り返りの発表原稿を見ながら報告する
○終わりの挨拶	・代表生徒が号令をかける (C)	・指導者が押しやすい位置にVOCAを持っていき、合図をする

(2) 配置図



(3) 本時の評価

A	・服を畳めたら、指導者に伝え、次の服をもらえたか	
B	・質問や報告をするときは丁寧な言葉遣いで話せたか ・報告をしている人の顔を見ることができたか	
C	・指導者と一緒にタブレット端末を用いて、活動中の様子を撮影できたか ・始まりと終わりの挨拶をVOCAを使い、合図をできたか。	

授業番号23 「目的地までの経路を調べよう」～インターネットを活用する～

場所:北棟2階 1—1教室

対 象： 高等部1年 男子4名，女子3名，計7名
授 業 者： ◎伊藤陽一
授業期間： 1月23日～2月10日 全3回 5時間
本 時： 3時間目／5時間 10：50～11：50

ユニット参加児童生徒の障害

☒知的障害 (7名 内，自閉症 3名)

☐知的障害・肢体不自由重複障害 (0名)

☐その他 ()

1. 本ユニットで取り扱う目標 (3 ケース抽出)

児童 生徒	短期目標 (○：ユニットの中心課題) (・：取り扱う関連課題)	本ユニットで取り扱う行動目標
A	○パソコンを使い，目的地や行き方を調べる	・目的地までの行き方を調べるため「目的地名 行き方」と入力して，目的地のホームページのアクセス，行き方などの項目をクリックする
B	○パソコンを使い，目的地までの経路を調べる ○嫌いな数字があっても指導者の言葉かけで，落ち着いて活動できるようにする	・目的地のホームページを検索して，「アクセス」の欄をクリックし最寄駅を調べる ・指導者が嫌いな数字を言っても，指導者と違う会話をすることで，落ち着いて授業に参加する
C	○パソコンを使い，自分が知りたい情報を調べる ○分からない時や困った時は指導者に相談する	・行きたい場所を考え，指導者と一緒に文字を入力して検索する ・活動ができていない時に，指導者が「どうしたの？」と言葉かけをすると，分からない内容を伝える

2. 本ユニットについて

本ユニットは自主通学生で，卒業後に自分で働きに行ったり，自分で調べた場所に行ったりすることを目指す生徒達で構成されている。これまでは校外学習で行く場所の行程表を作るために，目的地の最寄り駅を調べたり，学校からの経路を調べたりしてきた。そのことにより，今までは指導者に「どのバスに乗るの?」「どこで降りるの?」と聞いてきていた生徒達が，自分達で作った行程表を見直し，生徒同士で「この系統のバスに乗る」「○○の停留所で降りる」などの会話をする様子が見られるようになってきた。

現在は調べる施設や行く場所を指導者が中心となって決めているが，この授業の中で自分達の行きたい場所，知りたい情報を調べることで，より一層生徒達の活動する地域が広がることに加え，様々な情報の中から自分達に必要なものを手に入れることもできるようになると考える。

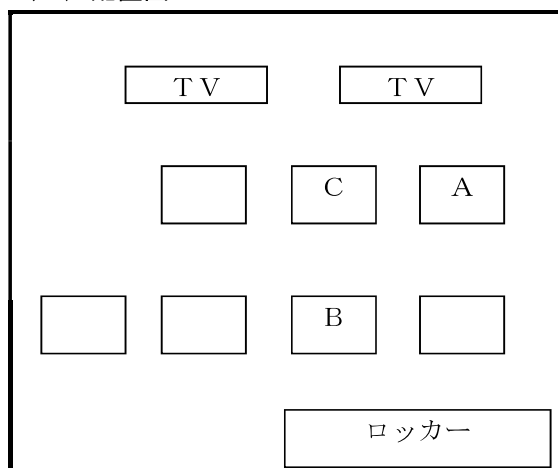
その情報の中には家庭生活・社会生活に必要な情報として，作りたい料理のレシピを調べたり，生活の中で必要な物を，どこでどれくらいの値段で購入することができるのかなど，より自立した生活を目指す上で必要になってくるスキルを修得することができると思われる。

3. 本時の授業について

(1) 本時の展開

学習内容	児童生徒の活動	できる状況づくり・支援
○初めの挨拶	○号令をかける	・号令がかからない場合には、言葉かけをして促す
○行きたい場所への経路を調べる	○インターネットを使って、自分が行きたい目的地のホームページを探す ・検索した一覧の中から目的地のアクセスページにいける所をクリックする (B) ○目的地の最寄り駅を調べる ・指導者と一緒に、調べることを入力する (C) ○自分の家の最寄り駅からの経路を調べる ○調べた事の情報を実アウトして用紙に記入する ・嫌いな数字が出てきても、できるだけ落ち着いて活動する (B) ・今行う活動が分からないときには、何をすればいいのかを指導者に聞く (C)	・インターネットのお気に入り検索サイトを登録しておく ・自分でキーワードが浮かびにくいときは、ヒントとなる言葉で促す ・クリックする場所が分からないときには同じページを印刷しておいてクリックする場所に印をつけておく ・何という文字を打てばいいか、分かるようにワードを紙に書いて提示する
○自分が調べた事を発表する	○自分で記入した用紙を見ながら、調べた事を発表する	・発表しやすいように、用紙に発表することを記入しておく ・他に気がむいたり、私語が出ていたりするときには、言葉かけをして聞くように促す
○終わりの挨拶	○号令をかける	・号令がかからない場合には、言葉かけをして促す

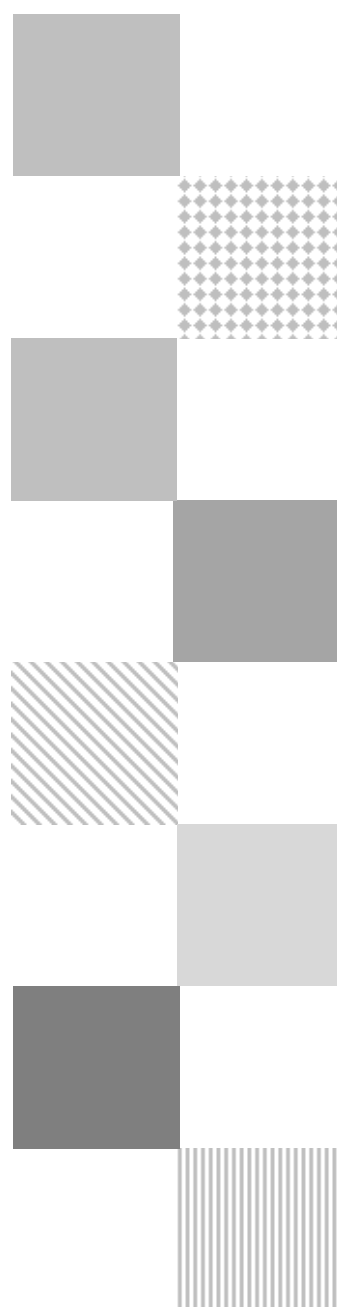
(2) 配置図



(3) 本時の評価

A	・目的地までの行き方を調べるため「目的地名 行き方」と入力して、目的地のホームページのアクセス、行き方などの項目をクリックすることができたか	
B	・目的地のホームページを検索して、アクセスをクリックし最寄り駅を調べられたか ・指導者が嫌いな数字を言っても、指導者と違う会話をすることで、落ち着いて授業に参加することができたか	
C	・パソコンの入力方法を平仮名に設定し、知りたい情報を入力することができたか ・活動ができていない時に、指導者が「どうしたの？」と言葉かけをすると、分からない内容を伝えられたか	

IV 研究紀要抜粋



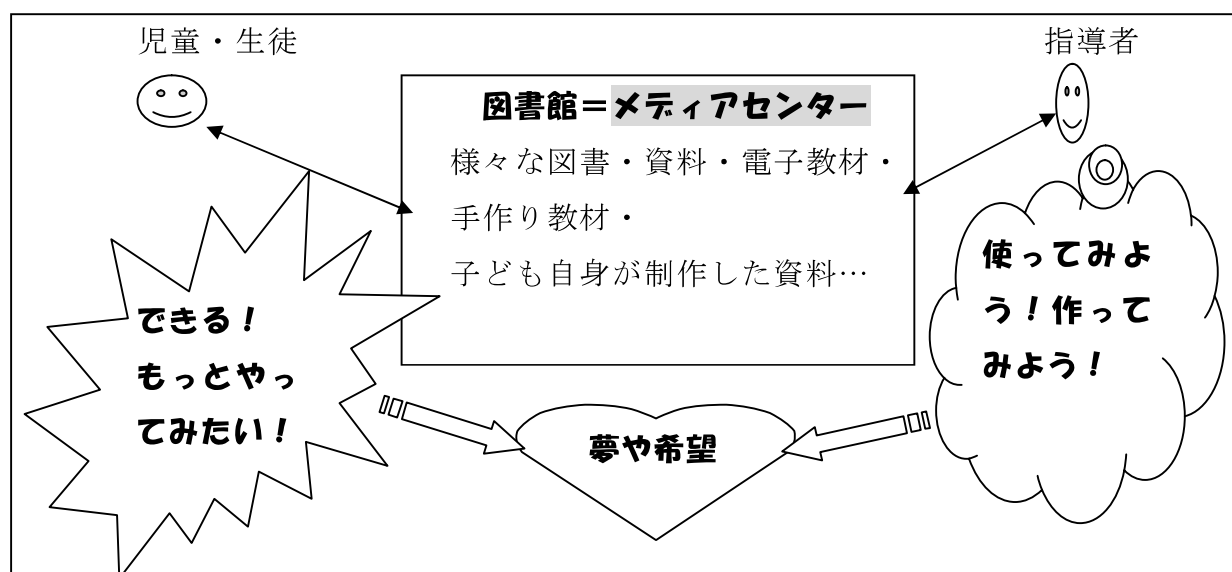
Ⅳ 2 1 世紀型 ICT 教育の創造モデル事業の取組

1 研究テーマ

「子どもの『できる』を引き出し、夢や希望を育てるメディアセンターとしての図書館活用」

(1) テーマ設定の理由

子どもたちは本が好きである。好きな本を読んで目を輝かせたり、音の出る本の音声を楽しんだり、仕掛けを触って喜んだりしている。現在も将来に渡っても、図書に親しみ心豊かな生活を送ってほしい。また、図書教材を活用することで、いろいろな情報の中からその時に必要な情報を取り出してほしい。図書教材とは、電子教材（画像・映像・音響・アプリなど）や図書の内容を補足する手作り教材も含める。図書館にある様々な資料と電子教材、手作り教材や子ども自身が制作したものとを切れ目なく融合させることで、子どもの「できる」「もっとやってみたい」という気持ちを引き出せるのではないかと考えた。図書館がそれらを管理し、活用できるようにメディアセンターとしての役割を果たすことで、自らそれらを活用しようとする子どもを育てることに繋がるのではないかと考えた。また、今好きな本から他の本にも興味を広げ、主体的に読書活動を楽しむだけでなく、自ら情報発信することのできる子どもを育てたい。役割を担う生徒会の生徒の「できる」も引き出していきたい。図書館に行けば何か面白いことができる、そんな図書教材の詰まったメディアセンターにしていきたいと考え、このテーマを設定した。



【図Ⅳ－１】テーマ設定の理由

（２） 今年度の見通し

昨年度より、「２１世紀型 ICT 教育の創造モデル事業」の研究指定を受け、１０台のタブレット型端末とメディアサーバーが使えることになった。そこで、子どもたちがタブレット型端末の操作に慣れるように、昼休みの図書室で自由に使えるようにするとともに、タブレット型端末のメディアサーバーに以下のような情報を保存することにした。

①読み聞かせ教材など

②子どもが授業で情報を収集し、制作している映像など

③書籍の内容を補足する支援方法や手順書など

メディアサーバーに蓄積した電子教材を、タブレット型端末やパソコンでいつでもどこでも活用できるように取組を進める。また、「DAISY 図書」なども入手し、デジタル図書の活用も推進していきたい。他にも、子どもたちが図書に親しみ「できる」ことを増やすために、いろいろな教材教具も活用していく。

昼休みの読み聞かせ放送も引き続き取り組み、昨年度より少し長めのお話を放送する。図書室での読み聞かせや新聞作りなど、生徒会（図書委員）の生徒が「できる」を活かして活躍するようにしていきたい。読書週間の取組も充実させて、児童生徒がいろいろな本に興味を持つようにしていく。

子どもたちが必要に応じて教材を活用できるようにするために、タブレット型端末のアプリや教材教具の使い方、読書週間の取組などを、まずは教職員に知らせていく。図書館に関する情報を発信し、授業への協力・支援をしていくことで、メディアセンターとしての機能を充実させていきたい。

２ 具体的な取組

（１） タブレット型端末を使った教材の活用

ア 調理実習の手順書

調理実習では、今まで、カードで手順書を作ってきた。事前に指導者が調理をし、作業の様子を写真に撮る。それに端的な説明を書き、ラミネートをかける。パンチで穴を開けてめくり方式にするか、上から下への一覧にするかなど、児童生徒の実態や課題に応じて作っていく。しかし、文字が読めない児童生徒もいるので、その時は指導者が説明をするようになる。もっと手軽に作れて使いやすい手順書が作れないかを考え、タブレット型端末のアプリを使って作ってみた。

(ア) 手順書の作り方

中学部の調理ユニットでは、前期に「おべんとうの おかずをつくろう」という学習をした。スクランブルエッグや焼く唐揚げ、ポテトサラダ、野菜炒めを2回ずつ作り、最後に分担しておかずを作って、家から持ってきた弁当箱につめるという授業である。まず、スクランブルエッグを作っている時（1回目）の授業の様子をタブレット型端末で写真に撮った。今回利用したアプリでは、必要な写真を取り込んだ後に音声で吹きこめる。それを工程順に並べ替えて繋げると、スライドショーのような手順書になる【写真1】。



【写真1】

2回目のスクランブルエッグ作りでは、1回目の活動の様子をタブレット型端末で再生し、大型テレビに映して導入時に一斉指導をした。生徒たちは、自分が調理をしている様子がテレビに映っていることもあって興味津々で見て、その時間に何を作るのか、どうやって作るのかを思い出すことができた。

その後、調理ユニットの指導者にタブレット型端末での手順書の作り方を説明すると、指導者は焼く唐揚げ以降の手順書を自分で作った。

できた手順書は、アプリの中にある「トンネル」という機能を使うと他のタブレット型端末にコピーができるため、数台のタブレット型端末を個別に使うことができる。最初から最後まで全部の工程の作業を続けて見ることもできるし、途中で止めてその工程の作業だけを見ることもできる。手順書を見ながら一人で全部の工程の作業をする課題や、1工程ずつ指導者と一緒に調理しながら自分から取り組もうとすることを増やす課題など、それぞれの生徒の課題に合わせて利用できる。

その手順書を使って学習した生徒の一例をあげる。

(イ) タブレット型端末の手順書を見て、自分から調理に取り組んだP

Pは、中学部1年の生徒である。調理をすることが好きであるが、やり方が分からず、ジャガイモの皮むきでは実の部分まで全部剥いてしまうこともあった。家庭での手伝いは遊んでしまうのでしていないが、保護者は、本人が好きなことで生活に生かせる力を身につけてほしいと願っている。担任も、本人ができることを活かして手伝いができるようになってほしいと思い、「学級やユニットで任された仕事を最後までやり遂げる」という長期目標を立て、いろいろな場面を設定している。Pが自分から取り組むためには見通しを持つことが必要であるため、「見通しを持って自ら活動に取り

組む」という長期目標も立てた。その目標を達成するために、今年度は、「使った食器や調理器具の後片付けをする」、「手順書に沿って調理をする」という短期目標を立てたので、調理ユニットに入って学習することにした。

Pは、文字よりも音声を手掛かりにして情報を得ることが得意である。写真をよく見て、その通りに模倣することもできる。タブレット型端末で作られた音声入りの手順書を使えば、調理の手順や方法が理解しやすいのではないかと、自分から興味を持って調理をするのではないかと考えた。そこで、導入で大型テレビに映った全部の工程の手順を確認した後、本人のテーブルの上にタブレット型端末を置くことにした。

Pのグループは、指導者のモデルを見たり説明を聞いたりして、1工程ずつ作業をしている。Pは、初めはタブレット型端末を使いたくて落ち着かなかったが、その時に作業する工程の画面をスタートさせるボタンをタップするように促すと、それをタップして、画面を見ながら同じように作業をした【写真2】。使い方が分かったと、自分からスタートボタンをタップすることもあった。



【写真2】

タブレット型端末で作った手順書は一つ一つの工程が写真で示されているので、やり方が分かればその写真を見るだけでその後もその作業を行なうことができる。しかし、その作業をどこまで（どれだけの時間）やればよいのかは分かりにくい。タイマーを別にセットして終わりを知らせることはできるが、タイマーをセットし直してしまう生徒もいる。そこで、写真の代わりに短い動画を入れれば、生徒はそれを見て、その動画が終わるまで作業を続けるのではないかと思います、取り組んでみた。

ポテトサラダ作りの時に、じゃがいもを潰すという工程がある。その工程の作業を事前に動画に撮り、それをアプリの手順書に入れると、Pは、その動画を見ながら、動画の画面が終わるまで、ジャガイモをずっと潰すことができた【写真3】。



【写真3】

Pは、夏休み明け頃から、母親が料理をしているのを見て、野菜の水切り器を回したり、フライパンでうどんを炒めたりしている。料理に興味を持って、自分から手伝うようになっている。

イ その他の取組

小学部の高学年ユニットでは、「体を動かそう～ウェスト筋肉番付～」という授業に取り組んだ。そのユニットの指導者が、サーキット運動の各動作の動画をタブレット型端末で撮り、授業で使うことにした。初めはタブレット型端末を大型テレビに繋いで、一つ一つの運動を覚えるように、一斉指導をした。次に、2～3台のタブレット型端末を各コーナーに置いて、そのコーナーでタブレット型端末に映っている運動をするようにした。児童はタブレット型端末を見ながら、映っている時間中、その運動をした【写真4】。動画が終わると、自分からスタートボタンをタップする児童もいた。



【写真4】

学習が進むにつれ、児童が自分でコーナーに行ってそのコーナーの運動をするために、さらに多くのタブレット型端末が必要になった。しかも、タブレット型端末で遊ぶことが好きな児童には興味が他に逸れないように、興味をひくアプリなどがその時間に使うタブレット型端末ではすぐに使えないようにする必要がある。そこで、ユニットの指導者が作った動画をメディアサーバーに保存し、どのタブレット型端末からでもその動画を見ることができるようにした。今ではコーナーごとにタブレット型端末を置くと、児童はそれを見てそれぞれの運動をしている。

(2) デジタル図書や教材教具の活用

ア DAISY 図書

6月末に「DAISY 図書わくわく文庫」を入手することができた。DAISY 図書とは、音声の出る電子図書で、文字や絵が見えないまたは見えにくい子どもたち、文字は読めるがどこを読んでいるのかが分かりにくくなる子どもたちに有効である。画面に本の頁が映し出され、文章を読む音声流れるが、読んでいる箇所が文字がマーカーで示されるため、どこを箇所を読んでいるのかが分かりやすい。たくさんの児童生徒に活用してほしいと思い、図書室の一角にパソコンを置いてそれを利用するコーナーを作った。図書室に「DAISY 図書わくわく文庫」のポスターを貼り、どういう図書が入っているのかが分かるようにした。昼休みの開館時に、電車が好きな生徒に勧めると、マーカーで示された箇所の音声を聞いて自分でも復唱しながら、喜んで読んだ。それを見ていた他の児童も、自分の順番が回ってくると楽しそうに読んだ。

絵によっては怖がって絵本に近づこうとしない生徒が「DAISY 図書わくわく文庫」

を使うと、興味深そうに見ることができたという事例もある。教室のパソコンでも「DAISY 図書わくわく文庫」が見られるので、図書室で何回か個別学習をした後、クラススタディの時間に大型テレビに映して、友達と一緒に見た。その後、その教材を基に、絵本と同じようなワンピースを作って友達に発表したり、感想を伝えたりする学習を展開することもできた。

また、「DAISY 図書わくわく文庫」は、音声聞いてそれを真似ることができるので、「ゆっくりと音読する」という課題がある生徒Qが、音声のスピードを落として利用した。音声が終わった後に指導者が一時停止の操作をすると、Qは今聞いたばかりの音声を模倣した。すぐに模倣できなかった時も、どこの箇所を読んだのかがマーカーで分かりやすく示されているので、その箇所の文字を読むことができた。ゆっくり読めた時に指導者が褒めると、Qは早口で読むことが少なくなってきた。

タブレット型端末にも DAISY 図書の再生アプリを入れたので、今後、ますます活用が広がるだろう。

イ 音声読み上げペン

この「ペン」はペン型の音声再生機で、専用シールにペンの先を当てると、録音した音声が出るようになっていく。身近な物にシールを貼ってものの名前を覚えたり、コミュニケーションボードにシールを貼って要求を伝えたりするように、コミュニケーションツールとして使われているが、図書館では音読練習に使えるようにした。ゆっくり音読できるようになることで、児童生徒がその力をいろいろな場面で活かせるようになるのではないかと考えたからである。「DAISY 図書わくわく文庫」に入っている図書以外の図書に専用シールを貼り、音声を入力



【写真5】

した。「音声読み上げペン」は、シールを貼る間隔を変えることで、一度に読み上げる箇所の長さを調整することができる。まずは、長い文ごとよりも、1～2音節ごとに短く分けてシールを貼り、使いやすいようにした。

前述のQが早速、使い始めた。Qは自分で「音声読み上げペン」をシールに当て、音声が出た後にすぐ読み上げた。「DAISY 図書わくわく文庫」の中の図書よりも一度に読む箇所を短くしたので、読みやすかったようである。この「ペン」で学習する時は、どこの箇所を読んでいるのかが分かりにくいので、「スライド式のリーディングトラッカー」を作って、1つのシールごとの文字だけが見えるようにした。「リーディン

グトラッカー」とは、幅5センチメートル、長さ20センチメートルぐらいの画用紙にラミネートをかけて中を繰り抜いたもので、他の文章を隠すことにより今読んでいる文章を見えやすくしたものである。それにスライドをつけて繰り抜いた部分の長さを調整できるようにしたので、文章の中のどの箇所を読んでいるのかが分かりやすくなる。Qは、大きな声でゆっくりと、感情をこめて読むことが増えてきた【写真5】。

(3) 図書に親しむ活動

ア 読み聞かせ放送とクイズ

昨年度と同じように、昼休みに読み聞かせの放送をした。今年度は、物語としてのお話の面白さに気付いてほしいと思い、以前よりも少し長めのお話（5～6分ぐらい）にした。絵や言葉のリズムを感性で受け取るだけでなく、少し長い本の読み聞かせを聞くことで、読解力を身につけることができるようになってほしいと考えた。

お話に関連したクイズも放送し、正解者にはプレゼントをした。例えば、『たなばたバス』の読み聞かせの時には、織姫と彦星に扮した指導者がバスに見立てたキャスターカーを引っ張って正解者を乗せた。『つきの よるの ものがたり』の読み聞かせでは大きなスクリーンで影絵をして、正解者のポーズを、タブレット型端末で写真に撮ってプリントアウトしたものを渡した。児童生徒はプレゼントを喜び、クイズを楽しむようになった。クイズの答えを考える中で、読み聞かせの本の中の好きな場面だけでなく、お話の内容にも注目するようになった子どもたちが増えたと思われる。

イ 大型絵本作り

読書週間の取組で、大型絵本を作った。まず、生徒会の生徒が指導者と一緒にお話を考えた。どんな内容にしたいのか、誰が出てくるのか、主人公の年齢は…？生徒たちは真剣に考え、「何か困ったことが起きた時に乗り越える話がいい」ということになった。乗り越える時には誰かに助けてもらうのか、自分で解決するのか、と問うと、「自分で乗り越えたい」という意見が出た。自分の経験を思い出したり、こうありたいという理想像を描いたりしながら考えた生徒もいた。小・中学部、高等部の児童生徒という幅広い年齢層に分かる内容で短いお話…というと難しかったが、何とか出来上がった。それを指導者がページに割り振り、絵の得意な児童生徒が描き、下絵を拡大して下書きをすると、生徒会の生徒が背景などの下塗りをした。「ここはこの色がいいかな？」とローラーや刷毛で塗ったり、タンポで色をつけたりして、楽しそうだった。

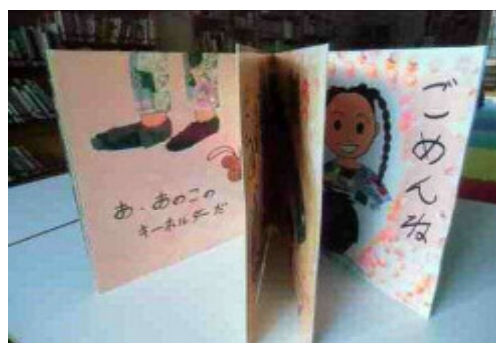
次に、昼休みに図書室に来た児童生徒が、布や紙を貼ったり色を塗ったりして絵が出来上がってきた。昼休みに図書室に来られない児童生徒もいるので、教室を回って、たくさんの児童生徒が参加できるようにした。生徒会の生徒が文字を書き、タイトルを考えた。指導者がラミネートフィルムを貼り、絵と絵を貼り合わせ、端をカットして出来上がった。

出来上がった大型絵本を披露すると、生徒会の生徒は拍手をして喜んだ。お話作りから始めて下塗り、仕上げなど、自分たちのできることを活かして作り上げたことで、達成感を味わえたようだ【写真6-1・2】。

大型絵本は学校祭文化の部の展示コーナーや、地域で開かれた本校の作品展に展示し、多くの人に見てもらえた。図書室の大型絵本コーナーに置いて、校内で利用できるようにした。



【写真6-1】



【写真6-2】

3 今年度の成果と課題

今年度は、タブレット型端末を使った手順書などの教材作りをすることができ、作り方を伝えていくことで、授業を担当するユニットの指導者が自分で作れるようになった。図書館の図書を使ったお話遊びなどの授業の様子もタブレット型端末で紹介動画を作り、メディアサーバーに保存した。今後、他の指導者も参考資料として利用できるだろう。メディアサーバーには「としょ」のフォルダがあり利用しやすくなっているので、読み聞かせ絵本も含めて、もっといろいろな教材を作り保存していきたい。

DAISY 図書や「音声読み上げペン」などの教材教具も、少しずつではあるが利用できるようになった。今後は、さらに多くの児童生徒が利用できるようにしていきたい。

また、昨年度より少し長めのお話を放送したりクイズを出したりするなどの取組によって、ある程度は、児童生徒が主体的に図書に親しむようになったと思われる。読

書週間に「わたしのすきな本」という取組をすると、児童生徒は友達や指導者が大型テレビに映っているのを喜び、そこで紹介された本を読み始めた生徒もいる。

今年度は「としょかんだより」を定期的に発行して図書の紹介をした。もっと広報活動をすることで、児童生徒が図書に親しめるようにしていきたい。

本を読むことによって身につく力はいろいろあるが、その中の一つだけでもいいから引き出していきたい。図書館の本が、その子どもに合った力を発見し伸ばしていくきっかけになったら嬉しい。本の読み聞かせに触れることで生まれる新しい反応を指導者が受け止めて、それぞれの課題に繋げていくようなことができないか。本の専門家であり、読み聞かせなどで子どもと接している図書館支援員と担任との連携を、もっと密にしていきたい。

利用しやすい図書館を作ることも必要である。今年度は、分類表示のボードを立て書架の整理をしてどこに何の本があるのかを分かりやすくし、検索用のパソコンも常備した。来年度は、低い書架を並べたり車いすのままでも入れるようにしたりして、より使いやすい図書館を作っていきたい。「乗り物が出てくる絵本」、「リズムの楽しい絵本」など、本のリスト作りもしていきたい。

学校外の諸機関（公立図書館やおもちゃライブラリーなど）と連携することも必要である。連携すれば、図書に関する情報を得て学校の図書館で活用できるし、そこでの取組を紹介して、児童生徒が公立図書館などを利用しやすくなるだろう。

子どもたちがわくわくして活用できるメディアセンターを、来年度も充実させていきたい。

